

イギリスのCambridge大学Ph.D.コース1年目の山本薫です。Information EngineeringのControl Groupというところに所属し、制御工学を学んでおります。私が留学を志すに至った理由、および10月に学期が始まってから現在までの留學生活について、報告いたします。

【留学を志した理由】

私は京都大学では建築学を専攻しており、4年生で研究室に配属されてから修士号を取得するまでの3年間は、主に建築物の制振構造を専門としておりました。研究活動に従事する中で、答えがあらかじめ用意されていない問題に試行錯誤しながら取り組むことに探求する喜びや創造する楽しみを見出し、研究者を志そうと決意するに至りました。そして、国際会議やワークショップ等で、世界の優れた研究者の方々に会う機会にも恵まれ、この方々のように私も世界の第一線で活躍する研究者になりたいと考えるようになりました。そのためにも、Cambridge大学のような世界のトップレベルの大学で優秀な研究者や学生と切磋琢磨することで確固たる実力を身に付けたいと思った、というのが留学を志した理由のひとつです。

また、建物の制振制御を学ぶ過程で、私は制御理論に興味を抱くようになり、Cambridge大学のMalcolm C. Smith教授が提案、開発したinertorという機械装置の存在を知りました。inertorとは回転体の回転慣性を利用することで、物体の加速度に比例する力を生じさせる装置であり、すでに自動車の制振制御において従来のパッシブダンパーを超える性能を発揮している新しい手法です。私はSmith教授の研究に非常に感銘を受け、ぜひとも同教授のもとでPh.D.を取得したいと考えるに至りました。これが、数ある大学の中でCambridge大学を選んだ最大の理由です。幸い希望通りにCambridge大学に入学することができ、現在Smith教授の指導のもと、inertorおよびその背景にある理論について学んでおります。

【アプリケーションから合格まで】

漠然と留学したいとは考えてはいましたが、はっきりと決意したのは修士2年生が始まる直前の3月末でした。京都大学で開かれたworkshopにSmith教授がいらっしゃり、直接お話しする機会にも恵まれたからです。出願は早いほうが有利と聞いていましたし、年内に出願したかったのですが、それには準備期間が9か月ほどしかなく、その間にTOEFLやIELTS等の英語の試験の要求スコアのクリア、願書の作成、奨学金の出願等をしなければならず、また、修士論文等、研究も忙しくなる時期でしたので、かなり大変だった覚えがあります。特に、留學生の学費はとても高額ですので、奨学金がとれなければたとえ合格できたとしても留学をあきらめざるを得ないだろうと考えておりましたので、とても不安でした。幸いにも私は船井情報科学振興財団の奨學生として採用していただくこととなり、大変ありがたく感じております。船井情報科学振興財団の奨學事業の選考はかなり早く、

また、学費全額補助、十分な生活費、支度金、往復渡航費と極めて充実した内容ですので、選考時期の遅い他の奨学金に出願する必要もなくなり精神的負担が随分軽くなりました。また、結局 Cambridge 大学へは 11 月末に出願したのですが、その願書に、奨学金を取得したことを記載することができました。これは選考にかなり有利に働いたのではないかと思います。1 月に Conditional Offer を、3 月に Unconditional Offer を得、無事 Cambridge 大学 Ph.D.コースに合格することができました。

【入学してから現在まで】

10 月に学期が始まり、まだ 2 か月弱ですが、とても充実した生活を送ることができています。私が通う Department of Engineering では、Ph.D.の 1 年目は授業をとることが必須であり、その他に、Reading Club、supervisor との打ち合わせなど、かなり忙しいですが、非常に良質な教育を受けることができていると感じております。Reading Club とは毎週テキスト 2 章分を読んで問題を解いていき、教員 1 人と学生数人で議論するという形式の勉強会のようなものです。私が受講しているものは学生が 3 人しかおらず、また内容もかなりハードですが、着実に力をつけることができますし、大変有意義です。また、私の supervisor である Smith 教授は、毎週課題を課し、これがまた大変なのですが、毎週必死に取り組み、週に 1 回マンツーマンでじっくりと議論することで、研究に必要な知識や考え方を身に着けることができていると感じています。本格的に研究を始める前に、土台をしっかりと固めることができるということはとてもありがたいことであり、Cambridge に来て本当によかったと思っています。